

貝になった画家

さく:しみず たくと



けんじさんは、子供の頃から絵を描くことが得意で、
学生時には似顔絵を描くボランティアに参加したり、
個展を開いたりしていました。

けんじさんは20歳の頃に統合失調症を発症しました。



統合失調症は考えや気持ちがまとまらなくなったり、誰かに見張られているような感じがしたり、妄想や幻覚が出現したりする病気です。

けんじさんは日帰りのリハビリを行う精神科デイケアに通いながら生活をしていましたが、体調を崩したことをきっかけに周りの人から悪口を言われているのではないかという思いが強くなり、次第にふさぎ込んでいきました。



あれだけ好きだった絵も描かなくなり……。

ついに、けんじさんは自宅の部屋に閉じこもり、
一人で生活することができなくなってしまいました。

そのため、けんじさんは入院して治療を受けることになりました。

しかし、入院してからも、けんじさんは周りの視線が気になり、
病室に閉じこもっているばかり……。



入院から3週間後、医師より作業療法の依頼があり、作業療法士はけんじさんのところに行きました。

けんじさんは「みんなが悪く言うから部屋の外には行きたくない」と頑なに人前に出ることを拒んでいました。

しかし、絵の話をする時だけは笑顔を見せてくれました。

絵を描くことが大事な作業だと気づいた作業療法士は、「僕と一緒に過ごすので、ホールで絵を描きませんか？」とけんじさんを誘いました。

けんじさんは少し不安そうな顔をして、ようやく頷いてくれました。



次の日からけんじさんの作業療法が始まりました。
ホールの隅に座り、周りの人に背を向けながら作業療法士の隣で、
けんじさんは絵を描き始めました。

「これは右側から光が当たっているから！」

「次は塗り絵じゃなくてデッサンがしたい！」

最初は30分でしたが
作業療法を開始してから1か月後には2時間
ホールで絵を描くことができるようになっていました。



けんじさんが
「絵を描くことで人の役に立ちたい」
「個展を開きたい」
と話していたことを思い出した作業療法士は新たな支援を考えます。

「似顔絵を描いてホールに飾りませんか？」

「けんじさんの絵はホールを華やかにしますよ」

少し驚いたけんじさんでしたが、
作業療法士の提案を受け入れてくれました。

最初はスタッフの似顔絵から描き、
その後は他の患者の似顔絵を描くことにしました。

すると…。



「けんじさん、今度は俺の似顔絵を描いてくれ」

「俺に絵の描き方を教えてくれよ」

気がつけば、けんじさんの周りには人が集まるようになり、
作業療法以外にも、ホールで過ごす時間が増えていきました。



「ときどき悪口を言われている気はするけど、人の怖さは少しずつ減ってきました」

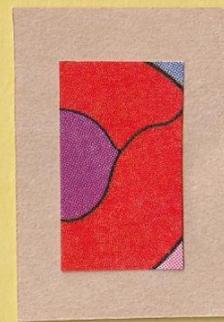
「早く退院して、もっといっぱい絵を描きたいな」

「退院したら個展を開きたいな」

1ヶ月後、けんじさんは退院しました。



山あり谷あり



太陽の花



いきがべい

しばらくして、一通の招待状が届きました。

けんじさんの個展が開かれるのです。

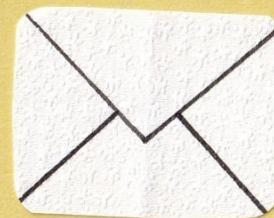
作業療法士は医師や看護師を誘って個展を見に行きました。

会場には退院後に描いた30点以上の作品と
嬉しそうなけんじさんの姿がありました。

「当時はすごく辛かったけど、入院生活が懐かしいな」

「みんなに絵をみてもらえて嬉しい」

「絵が売れたお金で新しい画材を買いたいな」



部屋に閉じこもることで周りの視線から身を守り
心と身体を休めていたけんじさん。

まだまだ殻に閉じこもることはありますが、
絵を描くというシェルターを盾にまたゆっくりと歩きだしました。

今では絵を描くことがけんじさんの「いきがい」になっています。

